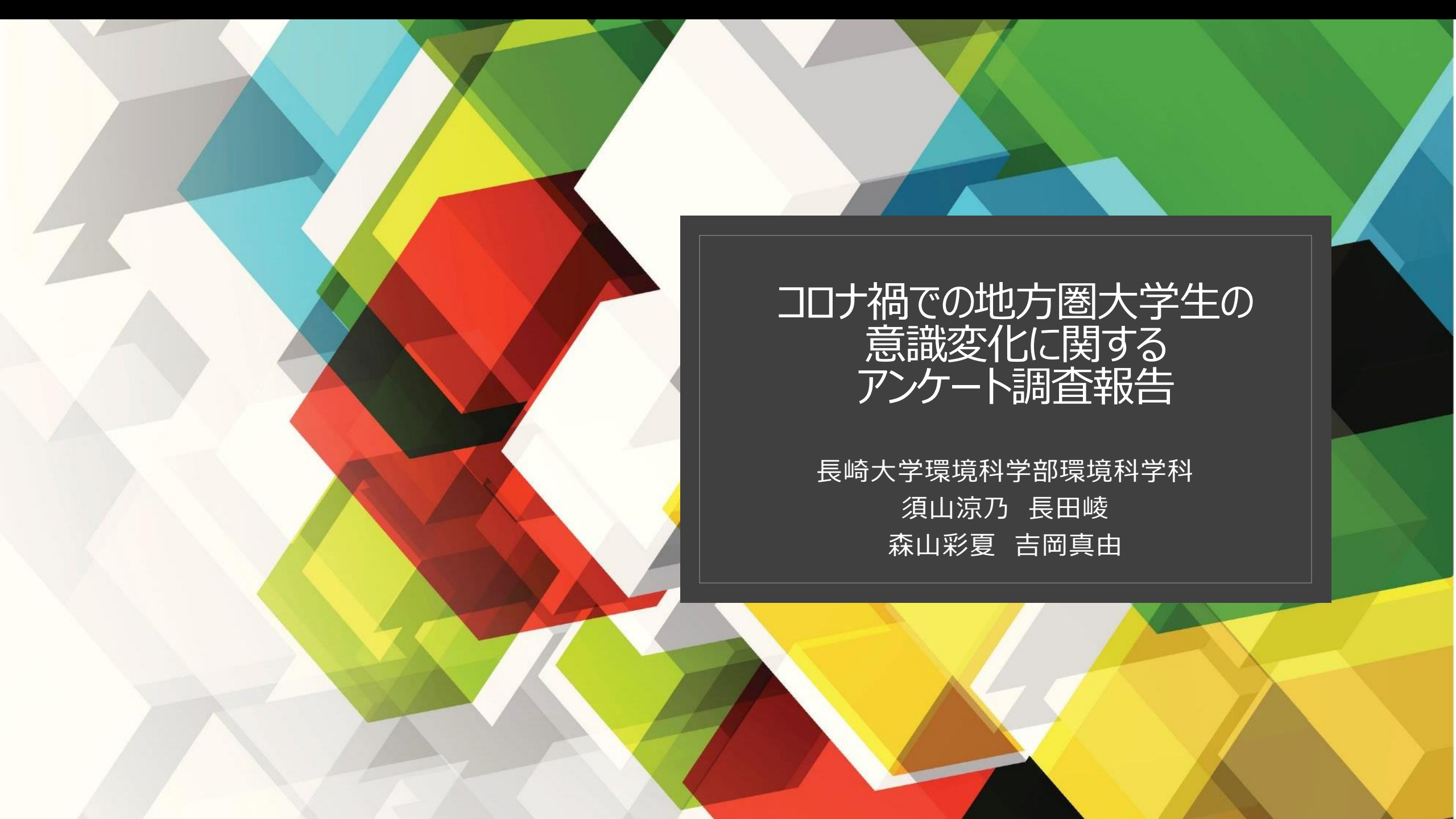




コロナ禍での地方圏大学生の 意識変化に関する アンケート調査報告

長崎大学環境科学部環境科学科

須山涼乃 長田峻

森山彩夏 吉岡真由

問い

地方圏の人々の東京への移住に対する意識と地方に住み続けることへの意識は変化するのか。

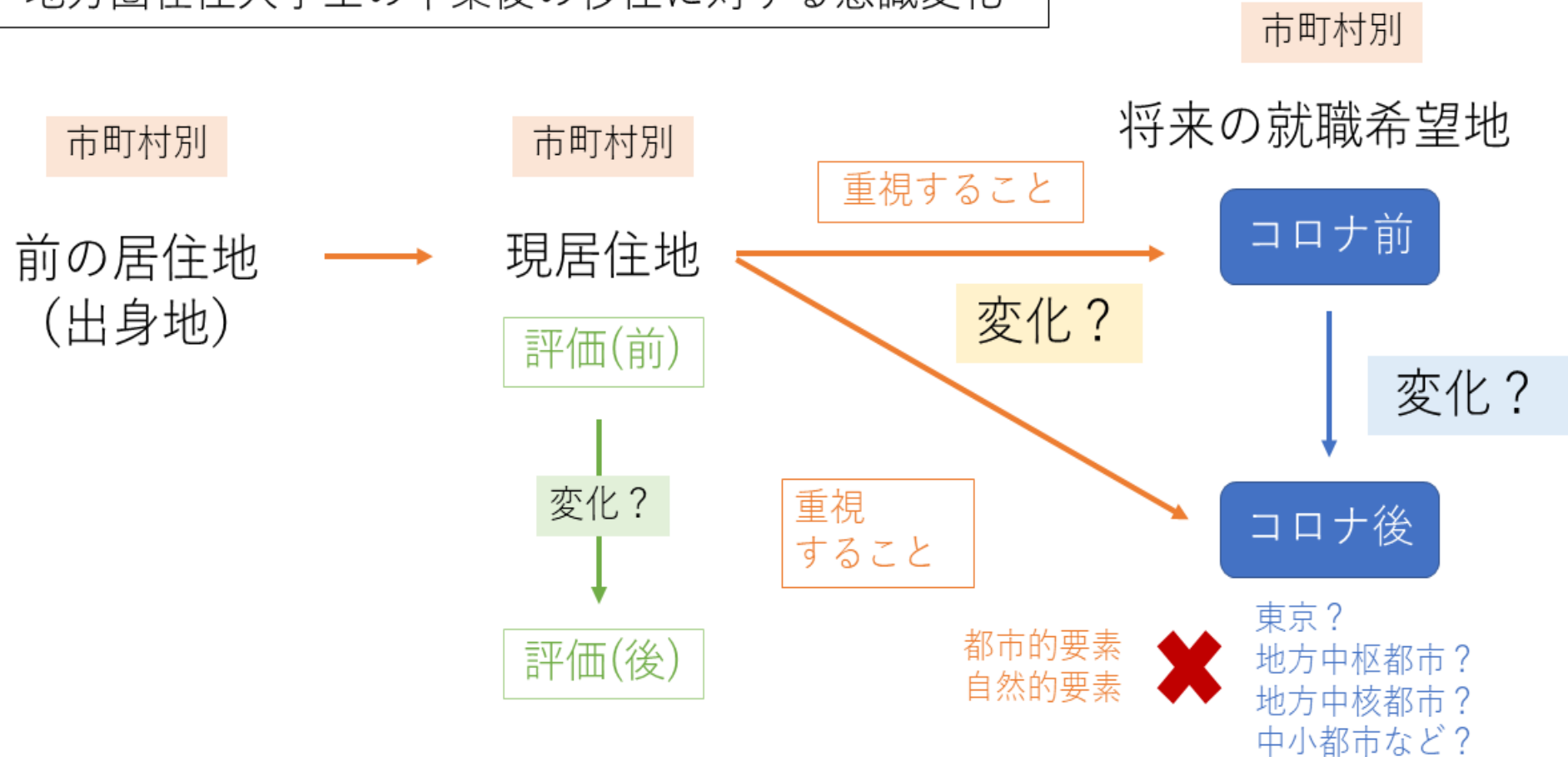
仮説

感染症の流行以前は東京のような大都会に憧れを持っていた地方の大学生の意識が感染症の流行により変化したのではないか？

地方の捉え方が変化し、地方中核都市の「ちょうどよさ」が評価されるようになったのではないか？

アンケート調査の枠組み

新型コロナは地方圏と東京圏の人の流れを変えるか？
→地方圏在住大学生の卒業後の移住に対する意識変化



調査概要

調査対象：地方圏の大学に在籍している大学生
(大学3年生・修士1年生)

実施時期：2021年3月4日～3月12日

調査手法：WEBアンケート
(株式会社クロス・マーケティングに依頼)

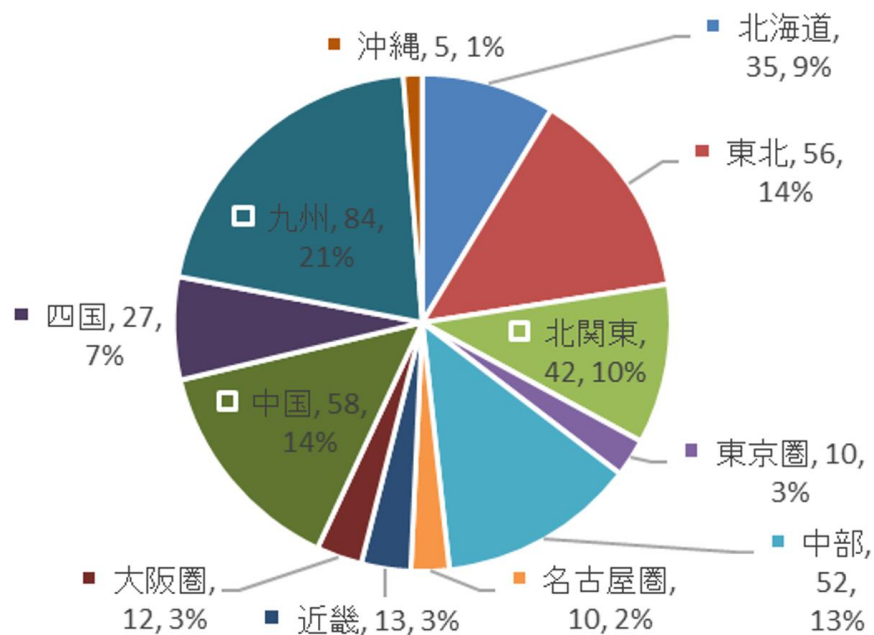
対象者数：450サンプルを目標に回答を収集し、
調査会社によるデータクリーニングを
経て、404人からの回答を得た。

回答者の属性

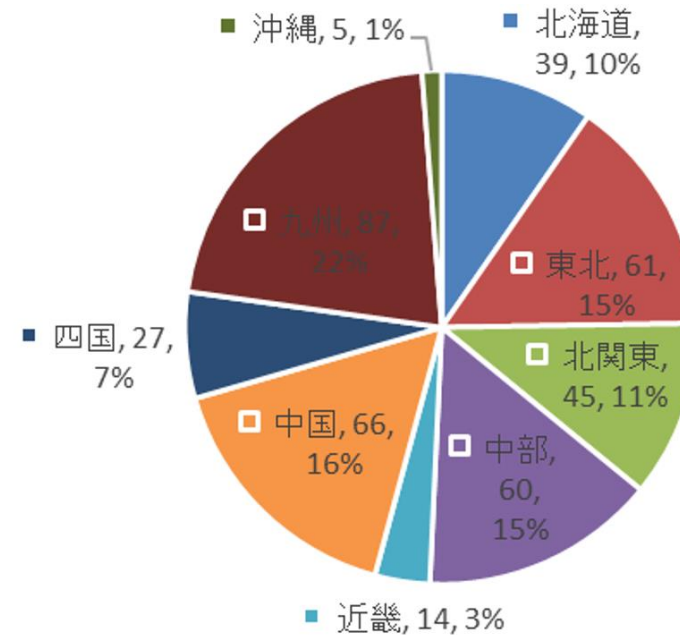
性別：男性111人(27%),女性293人(73%)

学年：学部3年生379人(94%),修士1年生25人(6%)

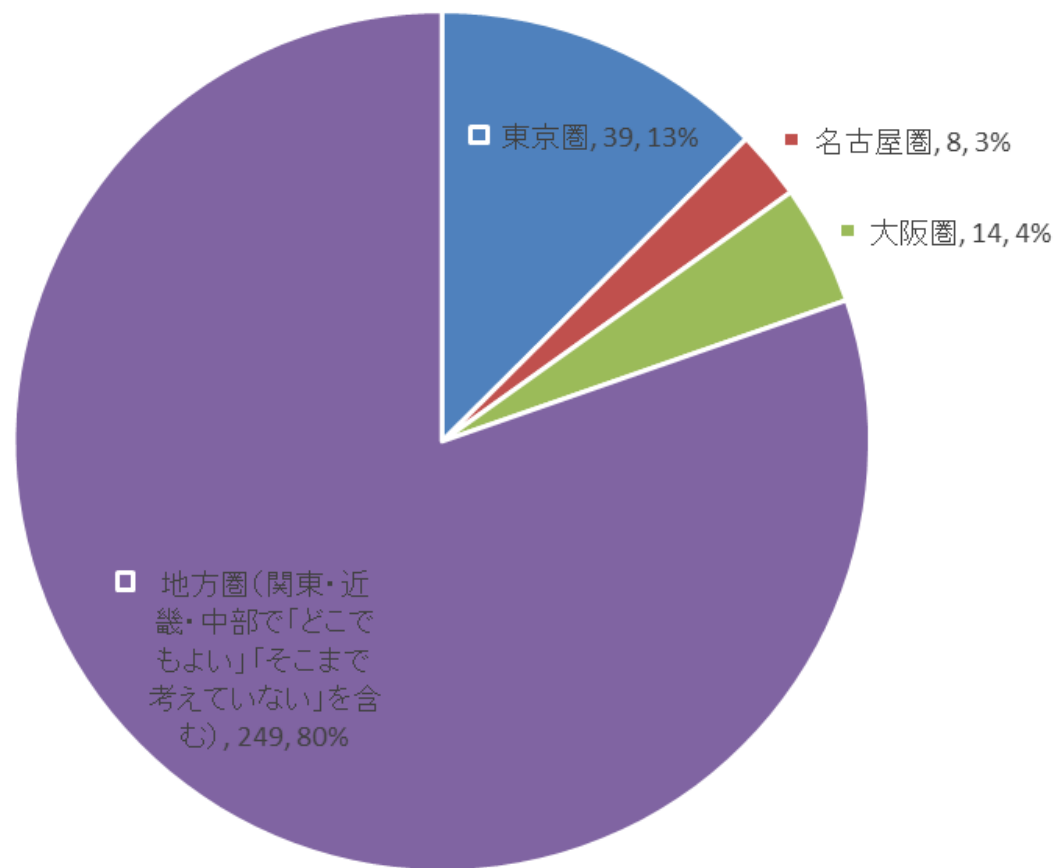
出身地



現居住地

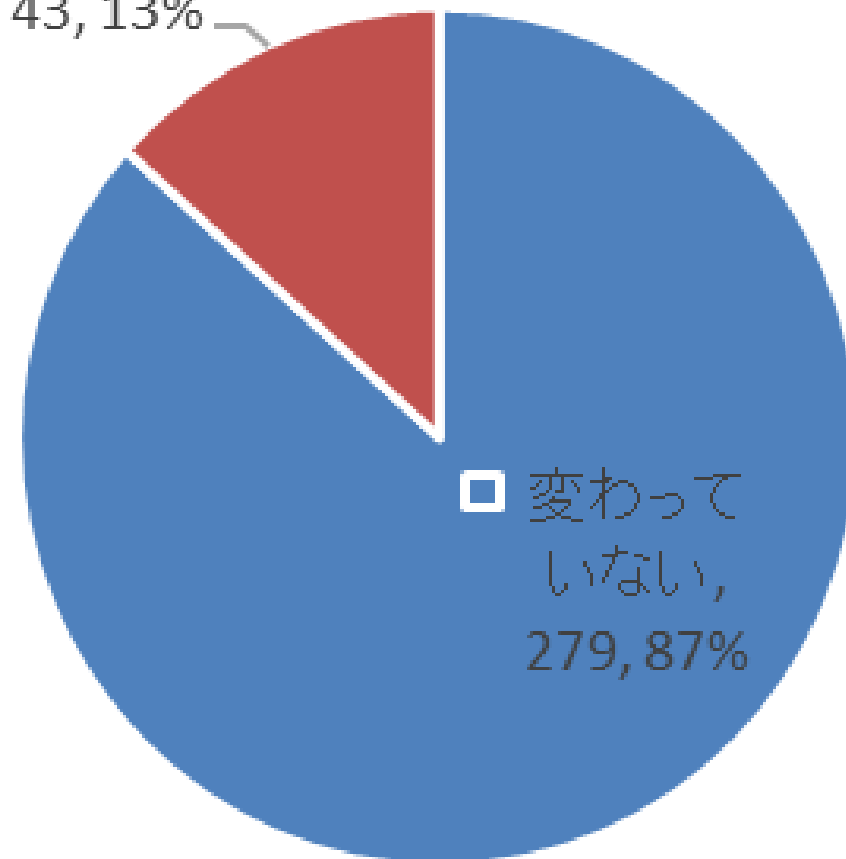


就職希望地（コロナ以前・第一希望）・
都道府県別集計

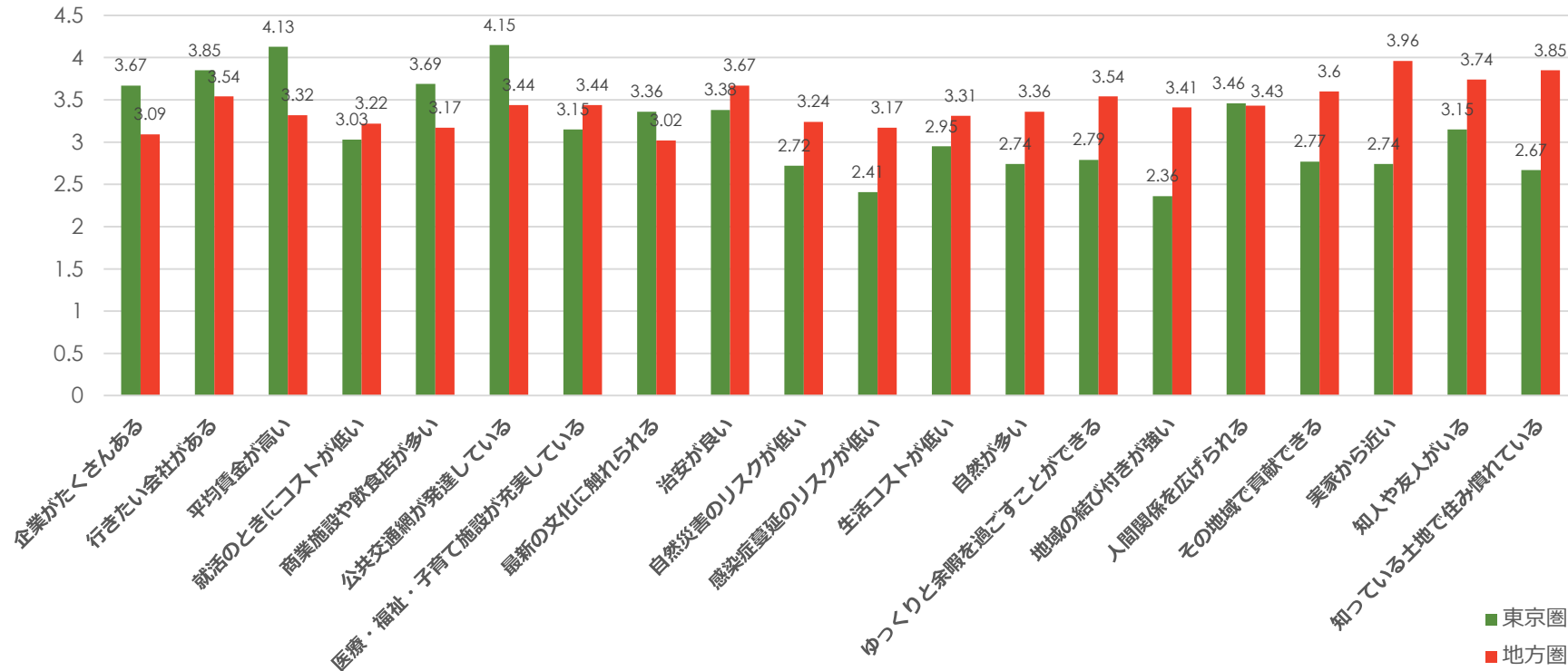


コロナ禍前後での就職希望地の変化
(n=322)

■ 変わって
いる, 43, 13%

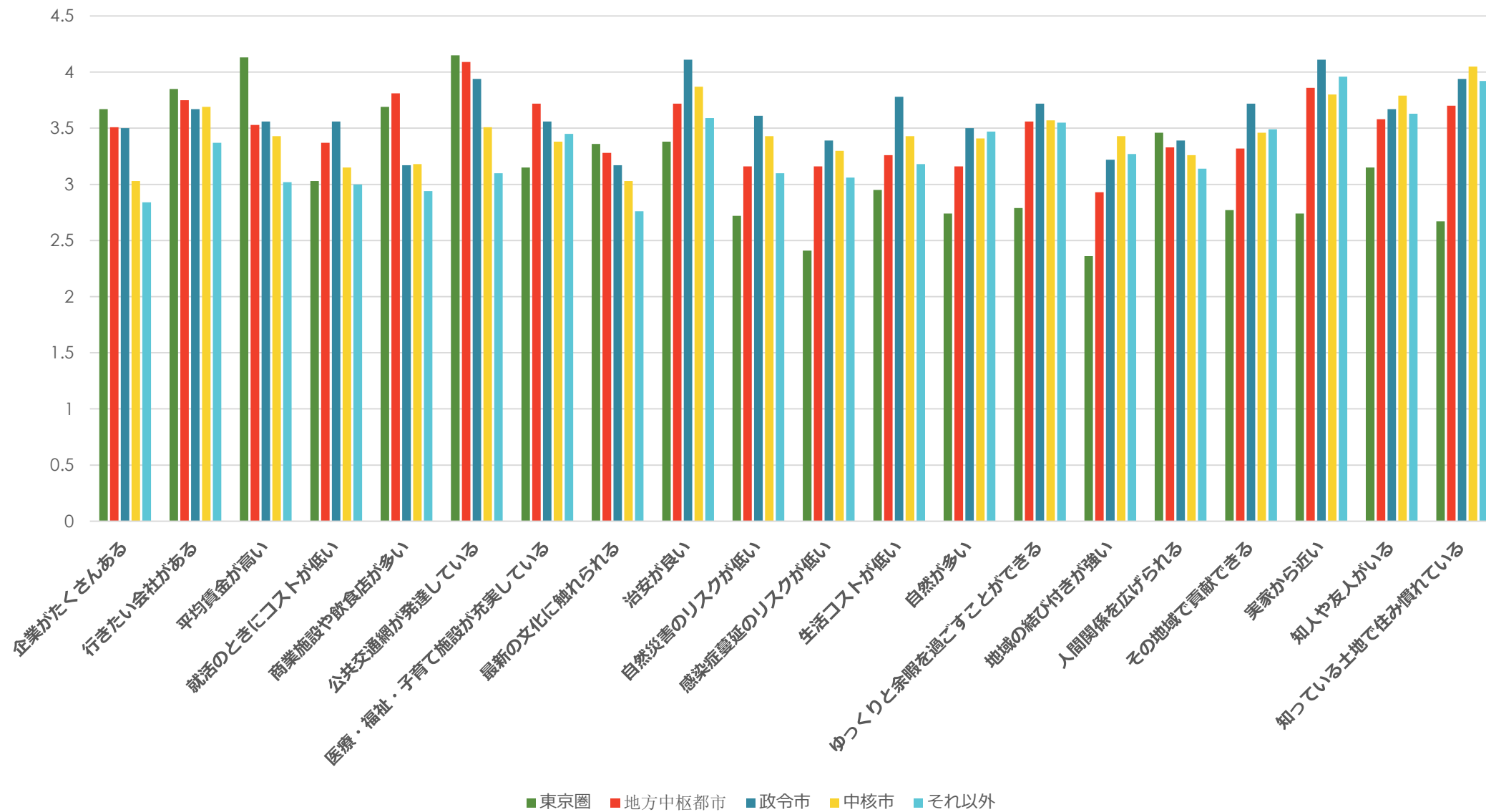


新型コロナ流行以前、就職希望地を選ぶときに重視していた条件

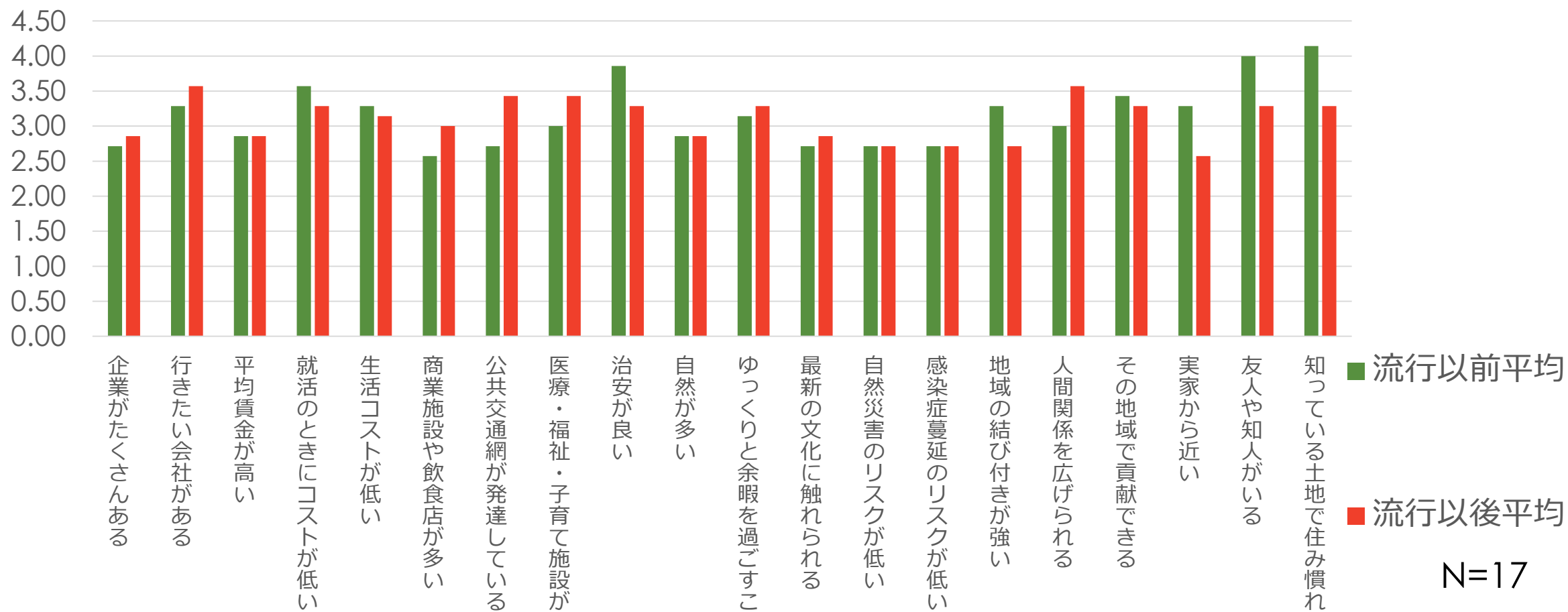


東京圏→ 平均賃金が高い、公共交通網が発達しているなど働くことに関する面を重視

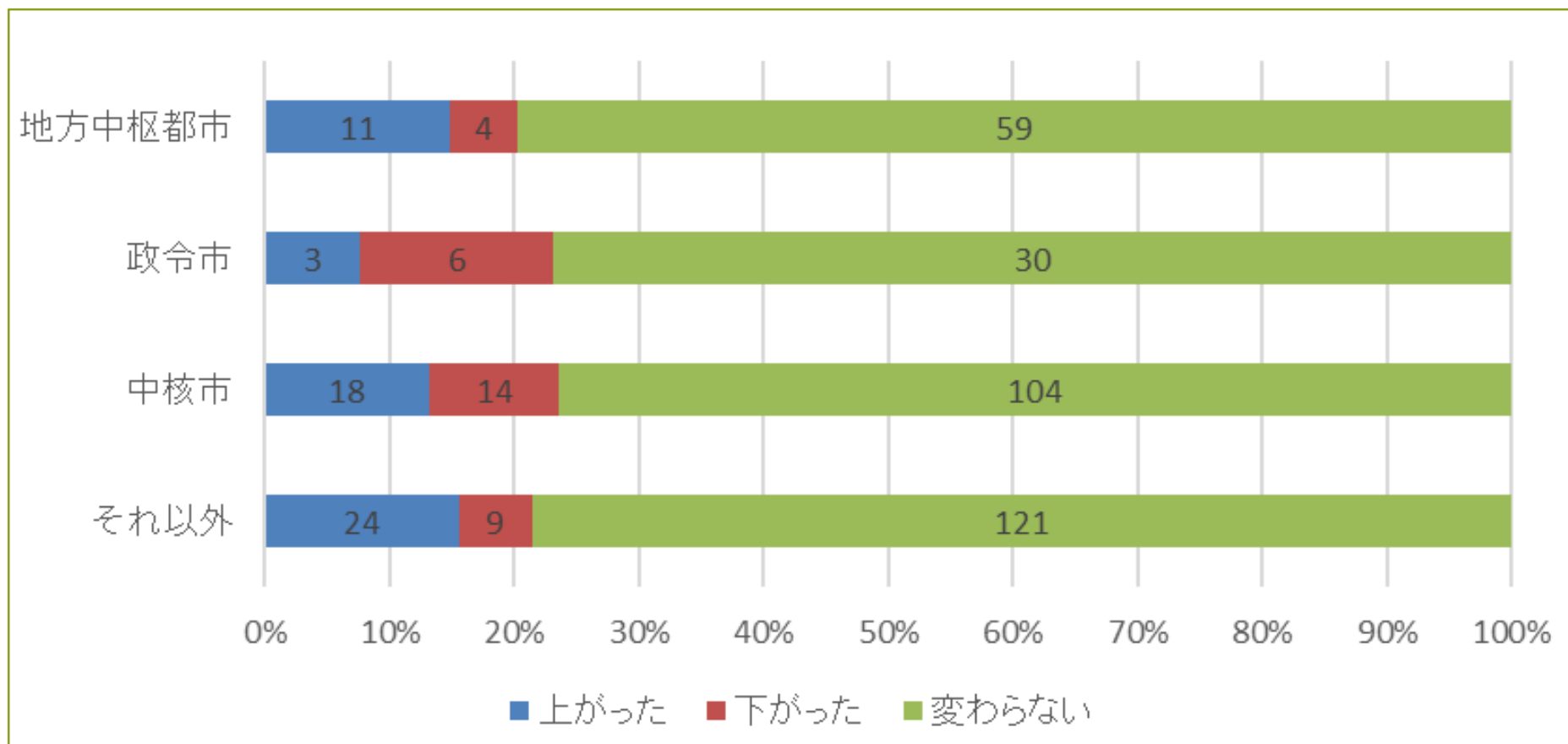
地方圏→ 実家から近い、知っている土地で住み慣れているなど過ごしやすさの面を重視



コロナ流行以前以後に就職希望地を都市規模的に 大きい場所へ変化させた人が重要視する項目別変移



コロナ禍における現居住地の評価の変化 (都市規模別)



	評価が上がった理由	評価が下がった理由
地方中核都市	便利なところに住んでいることを実感した。	近くのスーパーが品薄になった。
政令市	コロナへの対応が早いと思ったため、他の場合であっても対応が良さそうであると推測できるから。	コロナ禍でも対策をとる人が少ないように感じる。治安が悪い。
中核市	生活必需品には困らなく、あまり人も多すぎないので、ちょうどいい市に住んでいると思った。	都心に近いというメリットが薄れた。マスクをしていない人を見る頻度が多い。
それ以外	より、普段は顔を合わせる機会のなかった地域の方々や、ご近所の方と交流が増えたなど感じたから。	どこもお店があいておらず、バイトもあまりできなかったから。

・中核市とそれ以外の都市の評価が下がった点でコロナ感染者の増加を理由にしている回答が見られた。

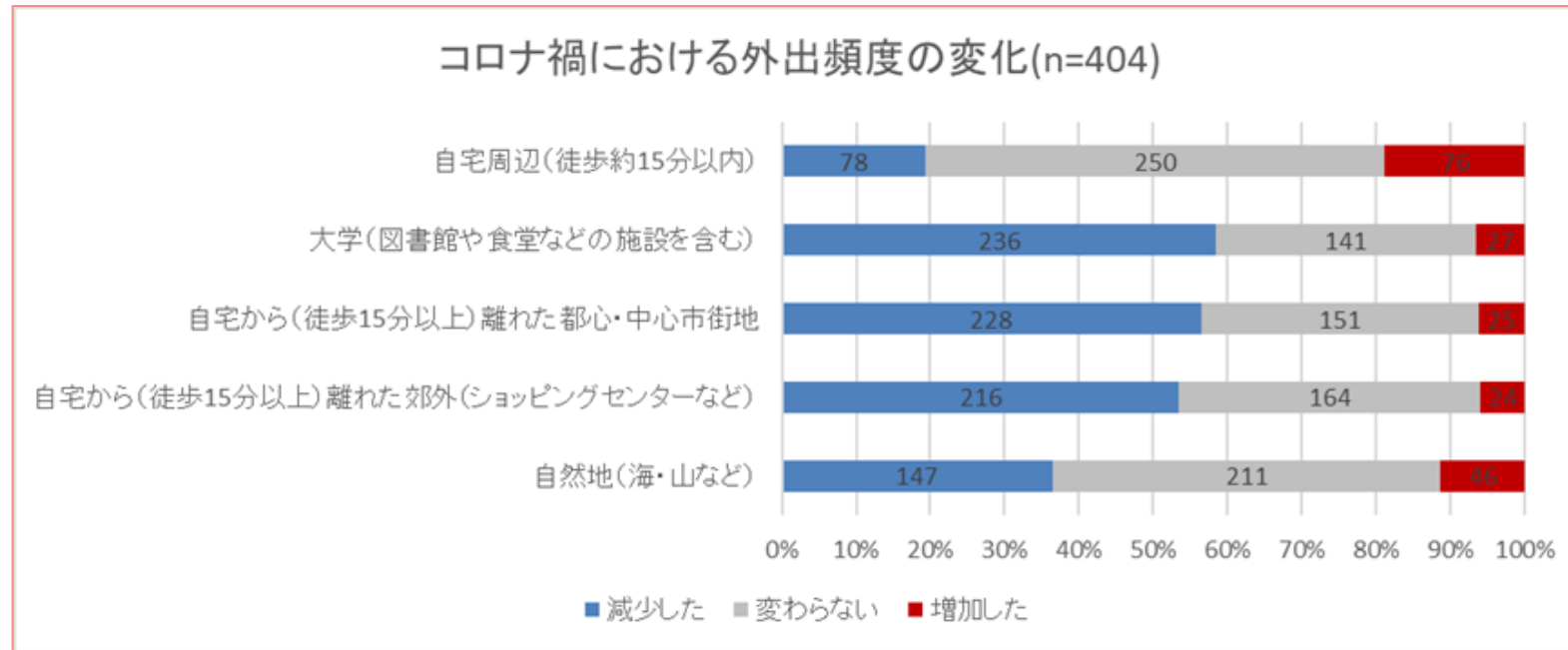
⇒都市規模が小さいほうが感染拡大に敏感な人が多いのではないか。

・中核市・それ以外の都市ではコロナの感染リスクに関して高評価の回答が多く見られた。

・地方中核都市で利便性の面から高評価の回答が多く見られた。

・アルバイトへの影響によって評価が下がったという回答もあった。

コロナ禍での人々の行動変化との関連性



外出頻度の変化にはコロナウイルスが大きく関係していることが分かった。しかしこのような行動意識が就業地の変化に直結するとは言えない結果となった。

考察・今後の課題

アフターコロナ社会において現在の時点では東京一極是正に寄与するほどの変化は見られなかった。しかし、リモートワークの普及による働き方への意識変化など学生に対して様々な選択肢を提供することにはなった。

それぞれの特性を生かした都市づくりとは何かを新たに見つめなおし、様々なニーズに応えうる多様性を地方圏に生み出すことが今後重要である。

アンケートでは進学希望者にもアンケートを取ったが、十分な分析が行えなかった。より多角的な分析については今後の課題となった。